

源順の屏風歌

原田 真理

本稿は、源順の屏風歌からその詠風の変化をとらえ、さらに和歌に対する意識について考察するものである。嵯峨源氏である源順は延喜十一(911)年に生まれ、永観元(963)年に没した。奨学院に学び、二十五歳ころ勤子内親王のために『倭名類聚抄』を編んでいる。学識はかなりのものがあつたと思われるが、官人としての道は開けなかった。村上天皇女御の微子女王や醍醐天皇の皇子である源高明などに近く侍したことがみえるが、微子女王の父である重明親王の母は源昇の女、高明の母は源唱の女周子で、いずれも順と同じ嵯峨源氏である。順と貴人との関わりは嵯峨源氏という血縁に頼るはかなかったらしい。天暦五(951)年、順四十歳の年に梨壺の五人に選ばれ、『後撰和歌集』の編纂と『萬葉集』の読解に当たることとなった。これ以前の順の和歌活動は明らかではなく、順の役割は萬葉集読解が中心であつたと考えられる。『倭名類聚抄』編纂の実績から、漢字と和語に通じていることが認められたものであろう。そもそも梨壺に召された五人のうち、歌人としての実績をもっていたのは大中臣能宣と清原元輔の二人だけである。紀時文と坂上望城の二人は、梨壺以降も歌人としての活動は伝わらない。つまり、梨壺の五人は『後撰和歌集』の編纂と『萬葉集』の読解という作業に必要な人間を集めたもので、必ずしも歌人である必要はなかったと考えられる。もともと漢文芸圈の人であり、歌人としての実績もない順は、梨壺で萬葉集読解作業に力を尽くした後は漢文芸作家にもどるほうが自然だつたとみることができる。しかし、『順集』に見えるように、『後撰和歌集』編纂後の順は、内裏等の依頼に応じて詠進したり独特の和歌を創作する等の活動を行っている。『古今和歌集』の後を継ぐ勅撰和歌集編纂という国家的事業の中心の一員に選ばれたこ

とで、順も勅撰集撰者という看板を得、それにふさわしく歌人としての活動を行ったのである。いくら機会を得たとしても、順に歌人として活動する意欲がなければ、この活動はなかったであろう。つまり、順の歌人としての活動が始まった背景には、歌人としても実績を残したいという順自身の強い意志が働いた結果とみることができる。また、既に高名な歌人であつた大中臣能宣や清原元輔らに伍して歌人としての評価を得るには、彼らには詠めない和歌、順独自の和歌を生み出す必要を感じたのではなからうか。彼独自の和歌を生み出そうとした際に力となつたのは、漢文学における知識であつた。『順集』に収録された漢字表記の和歌「進上 深右葉之 菖蒲草 千年五月 五日可刈(こころざし ふかきみぎはの あやめぐさちとせのさつき いつかかるべき)」は、詠歌時期は不明であるが、漢文芸圈作者であつた順にふさわしく、さらに見る者に萬葉集を意識させる作品となつている。順の和歌活動は、初めから独自の和歌を模索するものであつた。彼には「あめつちのうた」「双六盤歌」「碁盤歌」「馬毛名歌合」等々、漢文学の影響を受け、音を意識した和歌作品が多い。天暦五年の梨壺に召された時点から始まつた順の歌人としての活動は、天徳四(956)年内裏歌合に選ばれていることから一定の評価を得たといえる。また、順は天徳三年の内裏詩合にも選ばれており、和漢両方で評価されていたことがわかる。

一方、官人としても、梨壺に召されたところからようやく光が差すこととなった。このころが、のちに順自身「したがふ、なしつぼには、ならの都のふるうた、よみときえらびたてまつりし時には、すこしくれ竹のよごもりてゆくすゑをたのむをりもはべりき」(規子内親王家前栽歌合)と述べているように、最も希望に満ちた時期であつた。背景には、源高明の存在があつたと考えられる。このころ、高明の昇進と合わせるように、順も東宮藏人、民部大丞、下総権守、和泉守と昇進していく。しかし、左大臣まで上りつめた源高明は、

安和二(969)年に失脚してしまう。これにより、順は有力な後ろ盾を失い、有力貴族の御前での華やかな場で活躍する機会も乏しくなった。

『順集』には、屏風歌が六、障子歌一、歌数八十九首が収録されている。本稿では、その中から「大納言源朝臣、大饗のところにつべき四尺屏風調ぜしむるうた」の詞書をもつ十八首と「右兵衛督ただぎみの朝臣、あたらしく調ずる屏風のうた」の詞書をもつ十二首、「永観元年、一条の藤大納言のいへの寝殿の障子に、国国の名あるところを、ゑにかけるに、つくるうた」の詞書をもつ九首をとりあげる。大納言源朝臣とは源高明のことである。「源大納言」の屏風歌は、高明が急速に勢力を伸ばし始めた時期に歌人として活動を始めた順が詠んだ和歌ということになり、独自の歌風を示そうとする意欲を示す作品である。「右兵衛督ただぎみ」の屏風歌は安和元(968)年前の詠で、高明が左大臣として権勢を誇った時期の作である。「一条藤大納言」の障子歌は天元二(979)年前の詠と考えられ、順晩年の作である。「右兵衛督ただぎみ」と「一条藤大納言」とは、大中臣能宣にも同題の詠があり、両者の詠の比較を試みる。

① 大納言源朝臣、大饗のところにつべき四尺屏風調ぜしむるうた

源高明が大納言になったのは天曆七(963)年九月二十五日、康保三(966)年一月十七日に右大臣、翌四年十二月十三日に左大臣となっている。大饗を大臣に任じられた時のものとすれば右大臣もしくは左大臣任官時となるが、『順集』の歌序が年代順を原則としていることを考えると、定期的に早い大納言時代とみるべきであろう。元日と子日の和歌は、新春の喜びと希望に満ちた詠であるのは当然ながら、¹⁶⁶の「きのふまで冬ごもれりし」、¹⁶⁷「ちとせの春」には格別の祝意と希望が感じられる。高明の大納言任官直後の饗宴に向けて

の詠進ではなかるうか。高明が大納言に昇進したのは四十歳の時である。冬籠りを終えて春を迎える喜びと希望は政界で力を伸ばしてゆくはずの高明の姿であり、その一党である順の期待も大きかったにちがいない。

元日

¹⁶⁶ きのふまで冬ごもれりし
吉野の霞はけふやたちてそふらん

子日するところ

¹⁶⁷ いはにおふるねのびの松もたねしあればちとせの春はわれにまかせよ

二月、むまのひ、いなりまうでの人

¹⁶⁸ いなり山尾の上にたてるすぎすぎにゆきかふ人の絶えぬけふかな

あらた、うつところ

¹⁶⁹ おりたてばそこまでひつる袂さへなにうちかへすあら田なるらん

三月、はなつみの処

¹⁷⁰ いかにして花をつままし花のかを袖にとめくるつみもこそうれゆみいるところ

¹⁷¹ 春ふかき山にいればや梓弓ゆみ風にさへ花のちるらん

四月、神まつり

¹⁷² 神のますもりの下草風ふけばなびきてもみなまつる比かな

五月、ともしする人あり

¹⁷³ 郭公まつにつけてもともしする人も山辺によをあかすらん

六月、はらへ

¹⁷⁴ ねぎごとをきかずあらぶる神だにも今日はなごしと人はしらな

七月、たなばたまつるところ

¹⁷⁵ 七夕は空にしるらんさがにのいとかくばかりまつる心を

十五日、瓷もたせて山寺にまうづる人

176 今日のためをれる蓮のはをひろみ露おく山に我はきにけり

八月、またあふさかの関にこまむかへにゆく

177 なににわれよはにきつらん相坂のせきあけてこそ駒も引きけれ

人の家のつりどのに、まらうどあまたありて、つきを見る

178 水の面にやどれる月ののどけきはなみゐて人もねぬよなればか

九月、こたかがりするところ

179 里とほみ暮れなばのべにとまるべしいなおほせ鳥に宿やからまし

月夜にころもうつ処

180 風さむみなくかり金にあはすればよるの衣はうちまさりけり

十月、しがの山ごえの人人

181 名をきけば昔ながらの山なれどしぐるる比は色かはりけり

十一月、賀茂臨時祭みるくるま

182 ちはやぶるかものかはぎりきるなかにしるきはすれるころもなりけり

十二月、仏名おこなふいへ

183 冬やまの雪にはこれるあはれきのうへにぞくゆるのこすつみなく

一見して目立つのは、掛詞である。167は「ねのびの松」の種で

「蒔かせよ」と「任せよ」で千歳を寿ぎ、168は「杉」と「過ぎ」で

杉の並ぶ道を次々通り過ぎて行き交う人々を描く。169は「袂」と「荒

田」を「打ち返し」、170は「花」を摘む「罪」と「摘み」を掛けてい

る。171は「春ふかき」と「深き山」で「入る」と「射る」、172は「風」

になびくと人がこぞって行いう意の「なびく」、173は「ほととぎす」を

「待つ」と獵のための松明の「松につけて」、174は「夏越」と「和し」、

175は「ささがにのいと」を「架く」と「かくばかり」、176は「露おく」

と「奥山」、178は「並み」と「波」、181は「昔ながら」と「長柄山」、

182は「霧る」と「着る」がかかる。183は「樵れる」と「懲れる」、「薰

ゆる」と「悔ゆる」を掛け、「罪」と「積み」もかけている。掛詞は

よく用いられる修辞技法ではあるが、この屏風歌の場合十八首中十

四首に掛詞が用いられている。順の場合意識的に多用しているのは

明らかであろう。特に、167の「まかせよ」や168の「すぎすぎ」、173の

「まつにつけてともしする」などは一般的な掛詞の域を超えた遊戯

的技巧を駆使した詠みぶりで、順独自の詠みぶりとすべきものである

。この屏風歌に見える二つ目の特徴は、単なる情景や心情を表現

するのではなく理論的に詠む傾向が強いことである。「うだから」と

理由を述べたり、「なぜ」と疑問を持つ歌が多い。167「たねしあれば」

（種があるから）、169「なに」（どうして）、170「いかにして」（どう

やって）、171「山にいればや」（山に入ったから）、176「はをひろみ」

（葉が広いので）、177「なにに」（どうして）、178「ねぬよなればか」

（寝ない夜だから）、180「風さむみ」（風が寒いので）、181「昔なが

らの山なれど」「色かはりけり」（昔ながらの長柄山で変わらないの

に、時雨のころは色が変わることだ）という具合である。これらの

特徴は意図的かどうか疑わしいが、順の理のかった詠みぶりを示している。

② 右兵衛督ただぎみの朝臣、あたらしく調ずる屏風のうた

「右兵衛督ただぎみ」は右大臣藤原師輔の子で、祖父忠平の養子

となった忠君である。安和元（968）年に、右兵衛督で卒した。した

がって、この屏風歌は高明失脚前の順の詠である。

『能宣集』には、「右兵衛督ただぎみの朝臣の月令の屏風のれう」

という詞書で十三首収録されている。『順集』と『能宣集』とでは題

が異なる歌があり、同題でも詞書に差異がある。本稿では『順集』

をもととし、同題の『能宣集』中歌を並べて記す。

正月、人の池水のしもに梅の花あり

226 こほりとく風につけつつ梅のはなゆく水にさへ匂ふなりけり

二月、旅人さくらの花をらせたり

227 春日すらなにかしつると人とはば見せんとをれる花なちらしそ

三月、人の家に女ども柳の本にあそぶ

228 枝しげみ手につけそめて青柳のいとまなくともくらすけふかな

能宣 おなじはる(くれの春)、やなぎの木のもとに女あまた

りゐて、やなぎのえだをひきたれてもてあそぶところ

135 ちらでこそいろもまされるあをやぎのいとはよりてぞみる
べかりける

四月、神まつる

229 夏衣きてこそまされおなじくいは神のひもろぎときてかへらん

能宣 四月、いへの神まつる所

136 みむろやまみねのさかきばよろづよにとりてまつらむわが
やどのかみ

五月五日、庭に馬をひかせて見る

230 わかごまのときもみるべくあやめ草ひかぬさきにぞけふはひか
まし

六月、はらへ

231 岩浪のたちかへりせばあせきよりなごしのはらへすとや聞くら
ん

七月七日、庭にいとひく女あり

232 このねのなぞやかひなき七夕のあかぬ別をひきとどめねば

八月、こまむかへ

233 武蔵野のこまむかへにや関山のかひよりこえて今朝はきつらん

能宣 八月、こまむかへする所

140 あふさかにむかへぞきつるもちづきのこまのあしとく人に

さきだち

九月、しがの山越の人人

234 山おろしの風にもみぢの散る時はさざ浪ぞまづ色づきにける

能宣 九月、しがのやまごえ、をとこをむなゆきかひて、を

とこ又かへりてゆくところ

141 たちかへりこひてこそくれさざなみの山したみづのせきし
かへせば

十月、山里にかりする人來たり

235 山里に心あはする人ありと我はしたかにかはりてぞとふ

能宣 十一月、山ざとのしづかなるいへに女あまたはしにゐ

て、たかがりの人きてものいふ

143 とりのこゑせぬやまもととしらねばやかりのたよりに人の

とふらん

十一月、あじろ

236 あさ氷とくる網代のひをなればよれどあわにぞみえわたりける

能宣 十月、いへゐのところにあじろあり、もみぢおほくな

がれよれり

142 日をへつつもみぢばよするあじろこそ秋をとどむるせきに
はありけれ

十二月、仏名講師にものかづく

237 わたつみのこしの名残も今朝はあらじかづくはいかにあまなら
ずとも

能宣 十二月、仏名

144 人はいさをかしやすらんふゆくればとしのみつくるつみと
こそみれ

先の屏風歌で指摘した特徴は、二つともかなり薄れている。掛詞
では 228 の「青柳の糸」と「暇」、229 の「来て」と「着て」、232 の「ひ

きとどめ」と琴を「弾き」、²³³の山の「峽」と国名の「甲斐」、²³⁷の海の「わたつみ」と「綿」、「被く」「潜く」が見られるが、特に順独自というほどのものはない。²³⁵は「訪ふ」と「飛ぶ」を掛けたかとも思われるが、「我」が「飛ぶ」ことはないので、歌としてはかなり無理がある。この屏風歌で順らしさがみえるのは、²²⁹、²³⁰、²³⁷の三首である。²²⁹では、神祭りの光景に、暑さのために衣の紐を解く意を掛けた。²³⁰の「わかこま」を「あやめ草ひかぬさきにぞけふはひかまし」(菖蒲草を引く前に若駒を引きたいものだ)は、五月五日に「引く」ものである菖蒲と馬とを並べている。菖蒲と馬のつながりは「引く」だけで風情には欠けるものの、ことば遊びとしてはおもしろい。また、²³⁷では禄として綿を授けられた僧のようすを、「わたつみのこしの名残」(積み残すほどの綿をいただいた名残)もなく「被く」として「潜く海士」と掛け、凝った表現となっている。この三首には、単なる掛詞ではない表現を工夫しようとする意識が感じられる。^①に見られた理屈っぽさは薄らぎ、²²⁶や²³⁴など情景をおだやかに詠む歌がみられる。

順の歌を同題の能宣のと比較すると、やはり能宣の巧みさが際立つ。順の²²⁸は女たちの遊ぶようすを描くだけだが、能宣は青柳の風情を含めて表現し、そこに近づいて愛でる女たちを描き出している。順の²²⁹は先に述べたように夏の暑さを表現した遊戯的詠歌だが、能宣は神祭りであることを押さえたうえで永遠の祈りを込めた。「こまむかへ」では、順の²³³は逢坂の関と駒迎えを詠むだけだが、能宣の¹⁴⁰は駒の勢いを感じさせる。並べてみると、順の歌はいかにも言葉を並べた感じがする。ここが、歌人としての経験と資質の差というものであろうか。²³⁴や²³⁶のような和歌がみられるようになったのは、順が社会の求める和歌に合わせ独自性を弱めた結果ともいえよう。

③ 一条の藤大納言のいへの寝殿の障子に、国国の名あるところを、

ゑにかけるに、つくるうた

「一条の藤大納言」は、藤原師輔の子為光で太政大臣まで上っている。為光が大納言になったのは貞元二(977)年四月二十四日、寛和元(985)年七月二十日に右大臣に任じられた。順が卒したのは永観元(983)年だが、天元三(980)年には能登守になり任地に赴いている。任地から詠進した可能性もないわけではないが、歌序も能登へ下る際の歌の前になっており、それが『順集』最後に位置することから、この屏風歌は能登下向前の為光が大納言であった時期、つまり貞元二年から天元二年の間の作と考えられる。障子は襖障子のことで、そこに描かれた絵と対応した和歌で修飾する。和歌は複数の歌人に詠進させ、その中から選んで能筆家に書かせた。順も歌人の一人として依頼されたものであるう。

『能宣集』には、「一条の太政大臣のいへの障子のゑ、くにぐのなあるところどころをかせ侍りて、人人歌よみてつけよと侍りしかば、よみてたてまつりし」の詞書をもつ十四首がある。『順集』の和歌と同題のもののみを、順の歌に並べて記す。

夏、かがみの山

²⁶⁰名にしおへばくもらざりけりかがみ山むべこそなつのかげにみえけれ

能宣 なつ かがみの山

¹⁸⁹ちりかかるはななきなつはかがみやまのどけきかげぞまさるべらなる

秋 大井がは

²⁶¹大井川そまにあき風さむければたつ岩浪も雪とこそ見れ

能宣 (秋) 大井河

¹⁹²おほるがはうけるもみちばいかだしのをのしづくをしぐれとやおもふ

あまのはしだて

262 みつ塩ものぼりかねてぞかへるらし名にさへ高きあまのはし立

能宣 (冬) あまのはしだて

195 よさのうみのあまのはしだて見わたせばかたがたなみをわ
くるしめかも

八十島

263 やそ島をまことにいかでみてしかな春のいたらぬうらはありや
と

能宣 (春) やそしま

184 八十島のちちのいろいろさくはなをよろづよのはるきみの
みぞみむ

うきしま

264 定なき人の心にくらぶればただうき島は名のみなりけり

能宣 (春) うきしま

185 わたつみのそこにねざさぬうきしまはかめのせなかにつめ
るちりかも

たかさご

265 うちよする浪とをのへの松風とこゑたかさごやいづれなるらん

能宣 (冬) たかさご

196 ゆふぐれはあらしのこゑもたかさごのをのへのまつにつけ
てこそきけ

たごの浦

266 春くればたごのうら浪うらよくて出でまさりけりあまのつり舟

能宣 (春) たごのうら

186 あづまぢのたごのうらなみはるたてばきしのうへにさくは
なかとぞみる

おほよど

267 いせのあまにとひはきかねど大淀のはまのみるめはしるくぞ有

りける

能宣 (春) おほよど

188 はなのいろとときはのまつもおほよどのしづけきなみにか
げぞならへる

しかすがのわたり

268 ゆきかよふなせはあれどしかすがのわたりはあともなくぞあ
りける

能宣 (夏) しかすが

190 ゆきさしてわれかへらめやししかすがのわたりごこちのもの
うかるらむ

掛詞として目を引くのは、266の「浦」に「占」をかけたところく

らいである。①に見られた強引ともいえる掛詞は影を潜め、名所の
景色に重点を移していることがみえる。しかし、その詠みかたは能
宣とは大きく異なる。この屏風歌の両者の和歌を比較してまず目につくのは、順の心情吐露である。263では「春のいたらぬうらはあり
やと」と不遇な我が身の憂いを訴え、264では「定めなき人の心」と

いう。能宣が、184で「よろづよのはるきみのみぞみむ」(万代の春を
あなた様だけにご覧になるでしょう)、185では浮島を亀が蓬萊山を
載せているとする中国の伝説と結びつけ、「かめのせなか」に載って
いるとすることでたくまとめている。この障子歌は藤大納言邸の寝殿
を飾るものであり、当然祝意を込めた和歌を詠むべきものである。

能宣の和歌は、いかにも御殿を飾るにふさわしい。しかし、順の和
歌は、依頼人の期待に応えるより本人の憂いの心情を表わすものと
なっている。順の261は「岩浪」を冷たい「雪」と詠むのに対し、能
宣の192は「うけるもみぢば」と錦秋を詠んでいる。「しかすがのわた
り」では、能宣も「ものうかるらむ」とうかない気持ち詠むが、
これは、中務の「ゆけばありゆかねばくるししかすがのわたりにき

てぞおもひわづらふ」同様、しかすがのわたりのイメージをふまえた和歌である。順は²⁶⁸で「あともなくぞありける」と詠み、歌枕の名残もなく風情もない。なぜ順がこのような詠歌をしたのかが問題であり、そこに順の意識をうかがうことができる。

順が沈淪不遇の歌人の一人とされるように、『順集』には不遇を嘆く歌が目立つ。勘解由判官に留まり昇進しないことを、長官藤原朝成に訴えた長歌¹¹⁸の進呈は、上司へ自らの不遇を訴える目的をもつて行った行為であり、公的に提出する漢文の申文に対して、心情的に同情を得ようとする私的性格のものであった。宮中への働きかけとしては、²⁷⁶、²⁹⁴の「宣旨にてたてまつる御屏風のうた」に添えて蔵人に差し出した和歌二首がある。

²⁹⁵ ほともなきいづみばかりにしづむ身はいかなるつみのふかきなるらん

²⁹⁶ 天つ風空に吹きあぐるひまもあらば沢にぞたづは鳴くと告げな

こちらは、内裏に提出する公的な和歌に添えて、蔵人に見てもらうという形式である。「ほともなきいづみばかり」と和泉守を最後に任官できないでいる我が身を嘆き、「告げなん」とこの嘆きを伝えてほしいと詠む。蔵人を通して天皇近くに伝わることを期待しての行為だが、形式としては直訴ではない。不遇を嘆く和歌も場を選んで詠んでいるのである。その点、この祝意をこめるべき障子歌の中の訴嘆は、いかにも異様である。歌人としては、依頼人の希望に沿ってめでたい歌でまとめるべきである。それをせず、また詠進歌に添える和歌でもなく、障子歌本体で不遇を訴えたところに、この時期の順の重点がみえる。歌人としての評価より、その歌を目にした貴人の心を動かし官人としての活動の場を求めたのである。この障子歌は、高明失脚以降有力な抛り所を失い長く不遇である順が、光をはじめとする貴人たちとの接触の機会として利用しようとしたこ

とを示している。

歌人としての実績が官人としての異例の出世には直結しないことは、貫之や元輔らの例を挙げるまでもなく明らかである。順もそのことはわかっていたであろう。文人として『本朝文粹』に多くの作品をとられ、勅撰集撰者でもあった順は、和漢に通じ実績をもつた人物であった。文人としての学識も出世にはつながらなかった。和歌の世界での順は、双六盤歌や碁盤歌、あめつちの歌等々漢詩文の素養を生かした独自の和歌を創り、他に影響を与えている。その変遷を見れば、独自の和歌を工夫する一方で一般に評価される和歌を模索し研究していったようすがえる。彼は、素直に感情をうたうことは苦手であった。そこで、自分なりの和歌を創ろうと努力した結果特異な歌群を生み出した。しかし、彼の関心事は官人としての活動であり、不遇な境遇にあり続けた結果、歌人としての活動の場に訴嘆を持ち込むこととなった。訴嘆は、順周辺の歌人たちに共通するテーマである。しかし、順のそれは自己の心情を見つめる和歌ではなく、それらの和歌がもたらす現世での出世昇進と結びついた希望だったのである。

文中の和歌は、『国歌大観第三巻』所収の各家集に抛り、番号は国歌大観番号である。

参考文献

- 1 「源順伝及年譜」岡田希雄（立命館大学論叢 昭和一七年）
- 2 「王朝歌壇史 村上冷泉円融篇」山口博（昭和四二年 桜楓社）
- 3 「能宣集注釈」増田繁夫（平成七年貴重書刊行会）
- 4 「平安時代史事典」古代学協会・古代学研究所編（平成六年 角川書店）
- 5 「尊卑文脈」国史大系（昭和四一年 吉川弘文館）
- 6 「公卿補任」国史大系（昭和三九年 吉川弘文館）
- 7 『新編国歌大観CD・ROM版』（二〇〇三年 角川書店）